

泉鏡花

怪談女の輪

(正規表現版)

「やぶちゃん注・明治三三（一九〇〇）年二月発表。底本は岩波旧全集（巻二十七・一九四二年刊）に拠った。但し、加工データとして嘗つて大変お世話になった（私の鏡花の俳句集のこちらのものは、サイト主が贈って下さったものである）サイト「鏡花花鏡」で公開されていたもの（記憶では春陽堂版全集底本。岩波とはルビに違いがある）を使用させて戴いた。ここに御礼申し上げる。

踊り字「く」「ぐ」は生理的に嫌いなので、正字化した。曲亭馬琴の「近世美少年録」からの引用部は、底本では四字下げベタで、底本では二行に収まっているが、適宜、改行して三行で示した。

本作は「十七の秋」という主人公の語りから、作者自身の事績と正確に一致し、明治二二（一八八九）年の実話怪談となる。この年は鏡花にとってエポック・メイキングな年で、同年四月に友人の下宿で尾崎紅葉の「二人比丘尼色懺悔」を読んで、衝撃を受け、作家を志望し、同十一月には紅葉の門下に入ることを志して上京しているからである（翌年十月十九日に牛込の紅葉宅を訪ね、入門を許可され、その日から尾崎家で書生生活に入っている）。また、この二年前より、市内の井波他次郎の私塾で英語などを講じており、設定はそれに従うなら、「塾生」「英漢数学の教場」という語が出ることから、ロケーションは金沢のその塾の屋敷と考えてよい。因みに、実母鈴は明治一六（一八八三）年十二月、鏡花満七歳の時、次女やゑ出産の直後、産褥熱のために享年二十九の若さで永眠していた。これは鏡花の強いトラウマとして残ることとなる（以上の事績は当該ウィキに拠った）。

なお、[私自作の怪談集「淵藪志異」](#)の「二」に、私の母方の祖父が明治時代に金沢で体験した凄絶な怪奇実話がある。よろしければ、お読みあれ。二〇二二年五月七日公開 藪野直史

怪談女の輪

枕に就いたのは黄昏の頃、之を逢魔が時、雀色時などといふ一日の内人間の影法師が一番ぼんやりとする時で、五時から六時の間に起こつたこと、私が十七の秋のはじめ。

部屋は四疊敷しけた。薄暗い縦に長い一室、兩方が襖で何室も他の座敷へ出入が出来る。詰り奥の方から一方の襖を開けて、一方の襖から玄關へ通抜けられるのであつた。

一方は明窓の障子がはまつて、其外は疊二疊ばかりの、シツクひ叩の池で、金魚も緋鯉も居るのではない。建物で取廻はした此の一棟の其池のある上ばかり大屋根が長方形に切開いてあるから雨水が溜つて居る。雨落到敷詰めた礫には苔が生えて、蚰蜒が這ふ、濕けてじとじとする、内の細君が元結をこゝに棄てると、三十七一日にして化して足巻と名づける蠅螂の腹の寄生蟲となるといつて塾生は罵つた。池を圍んだ三方の羽目は板が外れて壁があらはれて居た。室数は總體十七もあつて、庭で取廻した大家だけれども、何百年の古邸、些も手が入らないから、鼠だらけ、埃だらけ、草だらけ。

塾生と家族とが住んで使つてゐるのは三室か四室に過ぎない。玄關を入ると十五六疊の板敷、其へ卓子椅子を備へて道場といつた格の、英漢數學の教場になつて居る。外の蜘蛛の巢の奥には何が住んでるか、内の者にも分りはせなんだ。

其日から數へて丁度一週間前の夜よ、夜學は無かつた頃で、晝間の通學生は歸つて了ひ、夕飯が済んで、私の部屋の卓子の上で、燈下に美少年録を讀んで居た。

一體塾では小説が嚴禁なので、うつかり教師に見着かると大目玉を喰ふのみならず、此以前も三馬の浮世風呂を一冊沒收されて四週間置放にされたため、貸本屋から嚴談に逢つて、大金を取られ、目を白くしたことがある。

其夜は教師も用達に出掛けて留守であつたから、良落着いて讀みはじめた。やがて、二足つかみの供振を、見返るお夏は手を上げて、憚様やとばかりに、夕暮近き野路の雨、思ふ男と相合傘の人目稀なる横溝、濡れぬ前こそ

今はしも、

と前後も辨へず讀んで居ると、私の卓子を横に附着けてある件の明取の障子へ、ぱらぱらと音がした。

忍んで小説を讀む内は、木にも萱にも心を置いたので、吃驚して、振返ると、又ばらばらばらばらといった。

雨か不知、時しも秋のはじめなり、洋燈に油をさす折に覗いた夕暮の空の模様では、今夜は眞晝の様な月夜でなければならぬと思ふ内も猶其音は絶えず聞える。おやおや裏庭の榎の大木の彼の葉が散込むにしては風もないがと、然う思ふと、はじめは臆病で障子を開けなかつたのが、今は薄氣味悪くなつて手を拱いて、思はず暗い天井を仰いで耳を澄ました。

一分、二分、間を措いては聞える霰のやうな音は次第に烈しくなつて、池に落込む小漑の形勢も交つて、一時は呼吸もつかれず、ものも言はれなかつた。だが、しばらくして少し靜まると、再なまけた連續した調子でばらばら。

家の内は不殘、寂として居たが、この音を知らないではなく、いづれも聲を飲んで脈を數へて居たらしい。

窓と筋斜に上下差向つて居る二階から、一度東京に来て博文館の店で働いて居たことのある、山田なにかといふ名代の臆病ものが、あてもなく、おいおいと沈んだ聲でいつた。

同時に一室措いた奥の居室から震へ聲で、何でせうね。更に、一寸何でせうね。止むことを得ず、えゝ、何ですか、音がしますが、と、之をキツカケに思ひ切きつて障子を開けた。池はひつくりかへつても居をらず、羽目板も落ちず、壁の破も平時のまゝで、月は形は見えないが光は眞白にさして居る。とばかりで、何事も無く、手早く又障子を閉めた。音はかはらず聞えて留まぬ。

處へ、細君はしどけない寢衣のまゝ、寢かきつけて居たらしい、乳呑兒を眞白な乳のあたりへしつかりと抱いて色を蒼うして出て見えたが、びつたり私の椅子の下に坐つて、石のやうに堅くなつて目めを睜つて居る。

おい山田下りて來い、と二階を大聲で呼ぶと、ワツといひさま、けたましく、石垣が崩れるやうにがたびしと駈け下りて、私の部屋一所になつた。いづれも一言もなし。

此上何事か起こつたら、三人とも團子に化つてしまつたらう。

何だか此池を仕切つた屋根のあたりで頻に礫を打つやうな音がしたが、ぐるぐる渦を巻いちやあ屋根の上を何十ともない礫がひよいひよい駈けて歩行く様だつた。をかしいか

ら、俺は門の處に立つて氣を取られて居たが、變だなあ、うむ、外は良い月夜で、蟲の這ふのが見えるやうだぜ、恐しく寒いぢやあないか、と折から歸つて來た教師はいつたのである。

幸ひ美少年録も見着からず、教師は細君を連れて別室に去り、音も其ツ切聞えずに濟すんだ。

夜が明けると、多勢の通學生をつかまへて、山田が其吹聴といつたらない。鶴が來て池で行水を使つたほどに、事大袈裟に立到る。

其奴引捕へて呉れようと、海陸軍を志願で、クライブ傳、三角術などを講じて居る連中が、鐵骨の扇、短刀などを持參で夜更まで詰懸る、近所の仕出屋から自辨で兵糧を取寄せる、百目蠟燭を買入れるといふ騒動。

四五日経つた、が豪傑連何の仕出したこともなく、無事にあそんで静しづまつて了つた。扱其のたそがれ、少し風の心持、私は熱が出て惡寒がしたから搔卷にくるまつて、轉寢の内も心が置かれる小説の搜索をされまいため、貸本を藏してある件の押入に附着いて寝た。眠くはないので、ぱちくりぱちくり目を睜いて居ても、物は幻に見える様になつて、天井も壁も卓子の脚も段々消えて行く心細さ。

塾の山田は、湯に行つて、教場にも二階にも誰も居らず、物音もしなかつた。枕頭へ……ばたばたといふ寢音、ものゝ近寄る氣勢がする。

枕をかへして、頭を上げた、が誰も來たのではなかつた。

しばらくすると、再、しとしとしとと摺足の軽い、譬へば身體の無いものが、踵ばかり疊を踏んで來るかと思ひ取られた。また顔を上げると何にも居らない。其時は前より天窓が重かつた、顔を上げるが物憂かつた。

繰返して三度、また寢音がしたが、其時は枕が上らなかつた。室内の空氣は唯彌が上に蔽重つて、おのづと重量が出来て壓へつけるやうな！

鼻も口も切さに堪へられず、手をもがいて空を拂ひながら呼吸も絶え絶えに身を起した、足が立つと、思はずよろめいて向うの襖へぶつかつたのである。

其まゝ押開けると、襖は開いたが何となくたてつけに粘氣があるやうに思つた。此處では風が涼しからうと、其を頼に恁うして次の室へ出たのだが矢張蒸暑い、押覆さつたやうで呼吸苦しい。

最(も)う一(ひと)つ向(むか)うの廣(ひろ)室(むろ)へ行(い)かうと、あへぎあへぎ六(ろ)畳(たた)敷(敷)を縦(たて)に切(き)つて行(い)くのだが、瞬(また)く内(うち)に凡(およ)そ五(ご)百(ひゃく)里(り)も歩(あ)り行(い)いたやうに感(かん)じて、疲(ひろ)勞(らう)して堪(た)へられぬ。取(とり)締(ぢ)るものはないのだから、部(へ)屋(や)の中央(ちゆう)に胸(むね)を抱(いだ)いて、立(た)ちながら吻(ほつ)と呼(い)吸(き)をついた。

まあ、彼(あ)の恐(おそろ)しい所(ところ)から何(なに)の位(くら)離(はな)れたらうと思(おも)つて怖(こは)々と振(ふり)かへると、もの五(ご)尺(しゃく)とは隔(へだ)たらぬ私(わたし)の居(い)室(むろ)の敷(敷)居(い)を跨(また)いで明(あ)かさま地(ぢ)に薄(うす)く紅(べに)のぼやけた絹(きぬ)に搦(から)まつて蒼(あを)白(しろ)い女(をんな)の脚(あし)ばかりが歩(あ)り行(い)いて來(き)た。思(おも)はず駈(か)け出(だ)した私(わたし)の身(み)體(たい)は疊(うへ)の上(うへ)をぐるぐるまはつたと思(おも)つた。其(そ)のも一(ひと)つ(ひと)の廣(ひろ)室(むろ)を夢(む)中(ちゆう)で突(つ)切(き)つたが、暗(く)がりで三(さん)尺(しゃく)の壁(かべ)の處(ところ)へ突(つ)當(あた)つて行(い)處(ところ)はない、此(こ)處(こ)で恐(おそろ)しいもの(もの)に捕(とら)へられるのかと思(おも)つて、あはれ神(かみ)にも佛(ほとけ)にも聞(き)えよと、其(その)壁(かべ)を破(やぶ)らうとして拳(こぶし)で敲(たた)くと、ぐらぐらとして開(あ)きさうであつた。力(ちから)を籠(こめ)て、向(むか)うへ押(お)して見(み)たが效(かう)がないので、手(て)許(もと)へ引(ひ)くと、颯(さつ)と開(ひら)いた。

目を塞(ふさ)いで飛(と)込(こ)まうとしたけれども、あかるかつたから驚(おどろ)いて退(まが)つた。

唯(ただ)見(み)ると、床(ま)の間(ま)も何(なん)にもない。心(こゝろ)持(も)十(じゆ)疊(じゆう)ばかりもあらうと思(おも)はれる一(ひと)室(むろ)にぐるりと輪(わ)になつて、凡(およ)そ二(に)十(じゆ)人(にん)餘(あま)り女(をんな)が居(い)た。私(わたし)は目(め)まひがした故(せ)か一(ひと)人(にん)も顔(かほ)は見(み)なかつた。又(また)顔(かほ)のある者(もの)も思(おも)はなかつた。白(しろ)い乳(ち)を出(だ)して居(い)るのは胸(むね)の處(ところ)ばかり、背(うしろ)向(むき)のは帯(おび)の結(ゆひ)目(め)許(もと)、疊(たた)み手(て)をついて居(い)るのもあつたし、立(た)て膝(ひざ)をして居(い)るのもあつたと思(おも)ふのと見(み)るのと瞬(また)くうち、ずらりと居(い)並(なら)んだのが一(いっ)齊(せい)に私(わたし)を見(み)た、と胸(むね)に應(こた)へた、爾(その)時(とき)、物(もの)凄(すご)い聲(こゑ)音を揃(そろ)へて、わあといつた、わあといつて笑(わら)ひつけた何(なん)とも頼(たの)まない、譬(たと)へやうのない聲(こゑ)が、天(あたま)窓(まど)から私(わたし)を引(ひ)抱(かか)へたやうに思(おも)つた。トタンに、背(うしろ)後(ご)から私(わたし)の身(み)體(たい)を横(よこ)切(き)つたのは例(れい)のもので、其(その)女(をんな)の脚(あし)が前(まへ)へ廻(まわ)つて、眼(め)さきに見(み)えた。呵(あな)呀(や)といふ間(ま)に内(うち)へ引(ひ)摺(ずり)込まれさうになつたので、はツとすると前(まへ)へ倒(たふ)れた。熱(ねつ)のある身(み)體(たい)はもんどりを打(う)つて、元(もと)のまゝ寢(ね)床(こ)の上(うへ)にドツと跳(を)どるのが身(み)を空(くう)に擲(なげ)つやうで、心(こゝろ)着(つ)くと地(ぢ)震(しん)かと思(おも)つたが、冷(つめ)たい汗(あせ)は瀧(たき)のやうに流(なが)れて、やがて枕(まくら)について綿(わた)わたのやうになつて我(われ)に返(かへ)つた。奥(おく)では頻(しきり)に嬰(あか)兒(ご)の泣(な)聲(こゑ)がした。

其(それ)から煩(わづら)ひついて、何(い)つまで經(た)つても治(なほ)らなかつたから、何(なに)もい(い)はないで其(その)内(うち)をさがつた。直(た)ちに忘(わす)れるやうに快(くわい)復(ふく)したのである。

地方(ちほう)でも其(その)界(かい)限(げん)は、封(ほう)建(けん)の頃(ころ)極(ごく)めて風(ふう)の悪(わる)い土(ち)町(まち)で、妙(めう)齡(れい)の婦(ふ)人(にん)の此(こ)處(ところ)へ連(つ)込(こ)まれたもの、また通(と)懸(かり)つたもの、況(ま)して腰(こし)元(もと)妾(めかけ)奉(ほう)公(こう)になど行(い)つたものゝ生(い)きて歸(かへ)つた例(ためし)はない、とあとで聞(き)いた。殊(こと)に件(くだん)の邸(やしき)に就(つ)いては、種(しゆ)々(じゆ)の話(わ)があるが、却(かへ)つて拵(こしら)へ事(じ)じみるから

いふまい。

教師は其あとで、嬰兒が夜泣をして堪へられないといふことで直に餘所へ越した。幾度も住人が變つて、今度のは久しく住んで居るさうである。